

広報



Public-relations Wakasa

タコ獲ったぞお〜っ！
〜こどもの日 朝市まつり〜（小川）

Contents

特集「三十三間山登山」	・・・ 2
まちの話題	・・・ 6
町長随筆、クイズ	・・・ 10
3歳で〜す、文芸	・・・ 11
情報BOX	・・・ 12
すまいる	・・・ 19
お知らせ「農業編」	・・・ 20
暮らしのカレンダー	・・・ 22

6

2011
No. 74

さん じ ゅ う さ ん げ ん ざ ん

三十三間山

標高 842.3 m、滋賀県との県境に位置し、その昔に京都市東山にある三十三間堂の棟木を切り出した山として伝えられています。

山頂は、木々に覆われ展望はできませんが、山頂南側の尾根にはススキと笹の大草原が広がっており、ここからは北西側の眼下に三方五湖や若狭湾、南東側には遠く琵琶湖、西側には久須夜ヶ岳（小浜市）や青葉山（高浜町）を望める大パノラマが広がります。

三十三間山の歴史

その昔、三十三間山は酒波寺岩劔大明神（近江国高島郡（現滋賀県高島市）の持ち山）で酒波寺が権利を持っていた。

そのため、倉見や能登野の人々は山へ入るための年貢を酒波寺へ納めることで、芝や薪を採ることができ、酒波寺からも祈祷のために倉見や能登野へ出向くなど往来がなされていた。

ところが、南北朝時代に、北朝の將軍である足利尊氏の支配下に置かれた近江国は、軍資金を集めるために、山に対しても重い課税をかけた始めた。

当時、酒波寺は重い年貢が支払えず、若狭国倉見荘の倉見一族と話をし、観応二年（1351年）に、三十三間山の西側に入る権利を倉見一族に譲渡し、その交換条件として、当時若狭国の宝物であった後冷泉天皇の直筆と伝えられる「大般若經六百卷」を酒波寺へ譲渡したという話が残っている。



今シーズンの 三十三間山が 山開きしました。



▲シーズン中の安全を祈願



▲出発を待つ多くの参加者



▲関係者によるテープカット



▲登山口にある石碑

4月29日（祝）に三十三間山が山開きし、関係者が登山前に神事でシーズン中の登山者の安全を祈願しました。

この山はほとんど人の手が加わっておらず、自然がそのまま残った山で、また登りやすい山として登山愛好家のみならず、地元の人々にも愛されています。

今シーズン最初の登山には約250人が参加し、春の陽気に包まれた三十三間山を楽しみました。

元気にいざ出発っ!!





842.3m

頂上

天空での昼食は眺めも味も最高っ!!



もう少しで到着!がんばれっ!



悪風退散!!
登山は天気が一番。



まだ半分も登ってません...



馬の背

かざかみ
風神

めおとまつ
夫婦松

丸太の橋だ。
ちゃんと手をつないでね。



最後の水場。
ここから先は水がありません。



まば
馬場
(最後の水場)

スタートしたばかり、
マイペースで登ろう。



下山後は、地元倉見区の有志の方から
三十三間山の恵みで作った"お餅"と"筍ご飯"をいただきました。





安全第一を心がけています。

十村岳人会
代表の清水春夫さん（右）と登山仲間

「三十三間山は今年に入って3回目。前回の登山では、まだ雪が残っていた。この山からは、天気の良い日に双眼鏡を使えば白山まで望むことができる。」



いつも参加しています。

末友 勝一さん（右）
富佐子さん（左）

「敦賀市から20人で参加。三十三間山の山開きには毎年参加している。今回は足元が悪かったが、天気が良くてよかった。」



この山はコースが面白い!!

高橋 宏治さん（右）
恵美子さん（左）



「敦賀市からの参加。天気が心配だったが、暑くもなく登山日和で良かった。ここは面白いコース。今度のツーデーマーチも歩く予定だよ。」



初制覇したぞ!!

百田 聖子さん（中央）
健人くん（左）
康志くん（右）

「子ども2人は初の三十三間山。2人ともどうだった？」
「（健人くん）疲れたけど楽しかった。」
「（康志くん）全部疲れた・・・。」



**若いもんには負けん!!
陽気な指笛おじさん。**

谷口 荒夫さん



「新聞を見て越前市から参加。81歳になってはじめて三十三間山に登った。若狭町は良いところですね。帰りにレインボーラインへも行きたいと思っています。」



区民が誇る山です。

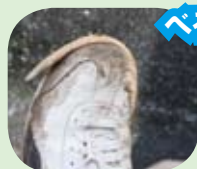
倉見振舞う会
代表の川島隆夫さん（左手前）とメンバー

「山開きに訪れた観光客に楽しんでもらい、また区民の団結力を高めるために、昨年から三十三間山の恵みで作ったお餅と筍ご飯を登山者に振る舞っています。」



**体験
レポート**

取材がてらにと軽い気持ちで数年ぶりに三十三間山へ登りましたが、日ごろの運動不足がたたった以上に疲れしました。また、先日の雨で足元が悪かったとはいえ、履いていた靴がこのあり様（→）で、靴ずれになりました。登山には登山に合った靴を選びましょう。（広報担当）



べろーん...

まちの話題

※広報紙に「あなた」の写真が写って
いましたらご連絡ください。
写真をさしあげます。
(企画情報課 TEL45-9110)



そらを泳ぐ鯉 (4/17)



▲優雅に泳ぐこいのほり

三方五湖の1つである三方湖へ流れ込む^{はず}鯉川にこいのほりが設置されました。

こいのほりは、町が十数年前に古くなったこいのほりを町の皆さんから寄付していただき毎年設置してきましたが、平成21年からは「地元のことは自分たちでやろう。」と、鳥浜区の青壮年会と子供会で設置しています。

この日設置された40匹のこいのほりは、春の風を受けて空を優雅に泳ぎ、見に来た子どもたちや、近くの国道を通る観光客の目を楽しませていました。



満月の月見ヨガ (4/18)

水月湖沿いに位置する海山区では昨年11月に区民同士の交流を目的に「満月会」を設立し、満月の夜にイベントを開催しています。

満月となったこの日には「月見ヨガ」を実施し、約20人が参加しました。

残念ながら外は雨模様でお月さまは見えず、屋内での実施となりましたが、今回のヨガの講師である塚本真理さん(兵庫県西宮市)は、「満月の日にヨガをすると、気が満たされて非常に体に良い」と話していました。

今後は、「月夜に湖畔を歩くムーンウォーク」などが予定されています。



▲満月の力を感じながらヨガをする参加者



食材に感謝 (4/26)

毎年恒例のふぐ供養が塩坂越海岸で行われました。

若狭町内の民宿や旅館、ホテルで消費されるふぐは年間約7,000匹とされ、当地には無くてはならない食材のひとつです。

そのお世話になったふぐをはじめとする若狭湾の食材に対して供養を行い、これからも若狭町が観光地として発展することを祈願しました。

法要の後には、海岸からふぐのほかにはグレやカサゴの稚魚が若狭湾へ放流されました。大きくなり、この美しい若狭湾へ帰ってきてくれることを願います。



▲若狭ふぐを放流する関係者



まちづくり講演会 (4/23)



▲参加者を前に講演する大森名誉教授

中央公民館においてまちづくり講演会を開催しました。

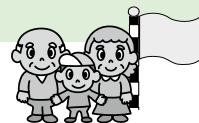
最初に町が進める協働のまちづくりの事例として、地域しあわせ応援モデル事業を活用した持田区の「黄色いハンカチ運動」と、みんなでつくる原材料支給事業を活用した白屋区の「公園遊具づくり」の取り組みが発表され、その後、東京大学名誉教授の大森彌さんにより「ともに育む若狭のあした」と題した講演会が行われました。

大森名誉教授からは、「持田区の合言葉である“持ちつ持たれつの持田”は、まちづくりの基礎である自立支援を表し、白屋区の遊具づくりは、子ども目線で考え、そして親子一緒に取り組んでいる。これら2つの事例はともに住民目線のまちづくりそのものである」と評価されました。



◀持田区の取り組みを発表した竹内収平さん
(持田)

映画「幸福の黄色いハンカチ」をヒントに、集落のお年寄りが毎朝元気であれば玄関に黄色い旗を掲げ、高齢者の安否を確認する取り組み。当初は空高く掲げようとしたが、対象が高齢者のため無理をせずに玄関に掲げることになりました。



◀白屋区の取り組みを発表した森下誉代さん
(白屋)

町のみんでつくる「原材料支給事業を活用して、区民みんなで公園遊具づくりを実施。親だけで遊具を作るのではなく、子ども目線で、また親子で取り組むことで新たな交流を育むことができました。



春の珍客 (4/27)

遊子の海岸にオットセイがやってきました。

春の陽気に誘われて、防波堤でウトウト日なぼっこをしているところを写真におさめました。

写真を元に越前松島水族館へ確認したところ、種類はキタオットセイで、体長約120～150cm、性別は不明。大きさから見ると比較的若いオットセイであるとのことでした。

キタオットセイはオホーツク海などに住む海洋性のオットセイで、エサである魚介類を追って若狭湾へ来たと思われます。

県内でも海上で稀に見かけることはあるらしいのですが、上陸しているのは珍しいとのことでした。



▲遊子の海岸に現れたキタオットセイ